

奥田昌道還暦記念会前日の集会

唯この一事を（抄録）

1992年10月3日（京都）

奥田 昌道

信仰生活の秘訣 全託の信 キリストを喜ぶ 目標に対する姿勢 勝利の十字架 キリストによる変貌 キリストとの出会い 一筋の道 キリストの復活は必然 イエス・キリストは主なり 全きキリストの生命 主に在る一事に向かつて

●信仰生活の秘訣

信仰生活というものは難しいものであると、皆さんお思いになるかも知れませんが、何とも難しくありません。第一、我々の力でやるものではないですから、キリスト様が我々をがっとう握りしめて、もう捕まえて離されないのだから、まかせておけばそれで良い。そのことを忘れなければ良いのです——本当に気がつけばキリスト様——気がつけばキリスト様の中に抱かれてあり、全部、キリストから流れて来る。祈りも、いわゆる信仰も、みことばも、力も、生命も、全部、キリスト様から流れて来るので、自分で今日は調子が悪いからもうちよつとエンジンをかけて少し熱くしなければいけないとか、自分でエンジンをかけても、それはだめなのです。

私の聖書は七色で塗ってあります。皆さんもそうだと思う。開けばもうなつかしのメロディなのです。知らぬ間にイエス・キリストの中に抱かれてあることに気がつく、我が魂の故里よということなのです。

そうすればもう楽にならざるを得ない。何か秘訣というか、難しいこともありません。さつき村岡兄が、「万人に可能な道だ、みんなに開かれた道だ」とおっしゃった。本当にその通りなのです。

日常生活の中で誰も息のできない人はありません。皆さんは呼吸をなさっています。寝ていても覚めていても呼吸している。これは呼吸をさせられている。祈りの呼吸は日常生活の中で毎日毎日が自然なことです。自分の生活というのは、自然体でなければどうにもならないところへいつの頃からか追い詰められてしまつて、そういう生活の中で主は、

「集会をしろ」

とおっしゃるわけです。そうしたら、

「分かりました、任せます、責任を取って下さい」

「当たり前じゃないか。誰の集会だ、キリスト様の集会じゃないか。個人の集会ではない」



と。そのことが本当に分かったのです。キリスト様が常に主である。キリストがこの中の主人公であって、みんないわばそれにお仕えしてお膳立てして、

「さあどうぞ、主よ語り給え、我は聞く」

と、それなのです。それでずっともって来たのです。そうでなければ、20年ももちませんよ。また、聞いている人もくたびれてしまいます。

京都キリスト召団鴨川温泉、鴨川のところにお湯がふつふつと沸いています。たくさんお出でになれば自然に沸いてきます。そのお湯に皆さんが浸かって、ああ良い湯だなと言って主を讚美しながら、本当にリフレッシュされて、新しくされて、元気になって帰って行く。元気というのは元の氣、キリストの持ち給う氣、そういう氣をいただいて本当にリフレッシュです。

●全託の信

よくキリストは、

「汝らの父は子供がパンを願うときに誰か石（軽石のような）を与える人があらうか」

「卵を求めるのにさそりを与えることがあろうか」

とか、おっしゃっていますが、みな形が似ている。さそりが身を丸めていると卵のようにみえる。

「求めよ、さらば与えられん。尋ねよ、さらば見出さん。門を叩け、さらば開かれん。すべて求むる者は得、尋ねる者は見出し、門を叩く者は開かるるなり。

汝等のうち父たる者、たれか其の子、魚を求めんに、魚の代りに蛇を与え、卵を求めんに蠍（おそり）を与えんや。さらば汝ら悪しき者ながら、善き賜物（たまもの）をその子らに与うるを知る。まして天の父は求むる者に聖霊を賜わざらんや」（ルカ

11・9～13）

みんな我々の日常生活のための聖言（みことば）なのです。直々に我々に日常の言葉を使って、野の花とか、空の鳥とか、種蒔きのたとえとか、誰にも分かるようにお話しになった。それを、

「はい」

と言って、全部いただければいい。豊かにいただければ生活がシンプルになります。そういうシンプルな生活をして、無駄なことにお金も時間も使わないことにして、主キリストに集中していけば、必ず道が開けていきます。自分の自信とかで言うのではない。長年の経験から、主さまを知れば知る程、素晴らしいお方だということを言わざるを得ないので。

私だけではない、いろいろな方がそれを味わってきておられます。サンダーシングしかり、その他きら星の如くキリストの証言者がいる。そういう言葉を信じて体験させられています。キリスト様を信じて、そこに身を委ねることです。



信じるということは、人が人を信じるというのはある程度冒険の要素があります。結婚の時もそうでしょ。「この人は今まで見たところでは間違いないけれど、どんな過去をもっているか分からないし、これからなんて益々分からないし」と思っただけで警戒ばかりしたら、結婚なんてできないでしょう。

でも、本当に信じるというのは投げ掛けていくことです。

そして本当に純情に素直に投げ掛ければ、受けとってくれる方はずっしりと受けとって、

「この魂を裏切ったら地獄行きだ。本当に幼き魂、小さき魂、それを侮るな^{あなど}」

と。キリストの言葉にありますよ、

「彼らを躓^{つまず}かせるくらいなら、石うすを首にかけられて海の中に沈められるほうが良い」

と、キリストの激しいお言葉があります。それはそれだけ、いと小さき者を大事にしてもらえるということなのです。

●キリストを喜ぶ

ちよつと二つ申し上げたいことがあります。一つは堀尾夕起子姉のことですが、皆さんにずっと6月くらいから祈っていただきました。今朝、堀尾姉のお母様、磯野さんから涙ながらのお声でしたが、「産まりました」と言ってお電話をいただきまして、10月3日の午前零時過ぎに男のお子さんが安産で2700グラム、森下さんにもご連絡があったそうです。15日ほど予定日より早かったそうです。実は初めのお嬢ちゃんの時はとても難産で、保育室にしばらくおられたそうです。けれども今度の坊ちゃんの場合は、本当に安産で母子共に健康で、前の赤ちゃんよりうんと元気であるということでした。お母さんが涙ながらに何度も、「ありがとうございました。皆様のお祈りのお陰です」と言っただけです。しかも前のお嬢さんがやはり10月3日なのですね。期せずして2年後で、前の方が1990年、今日の坊ちゃんが1992年10月3日、神様のなさることは素晴らしいですね。

そして、森下兄は今、イタリアの方へ学会で行っていらつしやるのですが、奥様にお電話しましたら、まさかこんなに早くお生まれになると思わないから、堀尾姉ご自身が数日前にお手紙を森下姉にお寄せになつて、その中に、

「いよいよ後何日かで、あるいは十数日でその日を迎えます。もうどんな子供が生まれようと、すなわち、故障があろうが、不具であろうが、病弱であろうが、どんな子供が生まれようと、これは総て主さまから与えられた恵みとして、賜物としてお受けいたします。（そういう気持ちで）今はその日を待っています」

という、お手紙だったというのです。それで奥様はそこまで信仰が純化され、成長してこれたと言つてとても喜んで、また感心しておられたら、「生まれました」というお手紙



が届いて、もう一日経たないうちに生まれましたということですね。そういうことで本当に森下兄妹の祈り、四国召団の祈り、これがそういった今度の喜びにつながったと思います。

我々は常に主にある兄弟姉妹として、互いにキリストを喜んで、キリストの形が一人ひとりの中に、また家庭の中に形作られていることが喜びなのです。

日常生活の中で、一人ひとりの生活の中に、そのおかれた場所でキリストが輝き給う。仏教でも「一隅を照らす」という言葉がありますね。本当に目立たない、しかしその人がいる所に光が射している。光が発してそこがぼつと明るいという存在。パウロさんも今日のみことばでそう言っておられます。

「汝ら^{つひや}咄かず、疑わずして、凡ての事をおこなえ。是なんじら責むべき所なく素直にして此の曲れる^{よこしま}邪悪なる時代に在りて神の瑕なき子とならん為なり。汝らは生命の言を保ちて、世の光のごとく此の時代に輝く」（ピリピ2・14、

15）

夜空に輝く星であると、パウロさんはおっしゃっておられます。

「斯^{かく}て我が走りしところ、勞せしところ、空しからず、キリストの日に、われ誇ることを得ん」（ピリピ2・16）

パウロの誇りは彼を通して生み出された兄弟姉妹の輝く姿なのです。この世ではよく

「二将功成りて万骨枯る」（指導者が成功を独り占めし、その下で働いた者は顧^{かえりみ}られないことのたとえ。詩人曹松の『己亥歲』参照）

と言うのですね、分かりますか。

この世の原理は「二将功なりて万骨枯る」です。でも、キリストはどうですか。

「私はあなたの方^{つか}の中で仕える者である」

とおっしゃった。

「この世では上に立つ人はいばつて仕えさせて胸をはっている。ところがあなた方はそうであつてはならない」
と、福音書の中で何度も出てくる。

「私はあなたの方^{つか}の中で仕える者である。事実あなたの方のために生命を捨てる」

と、キリストは本当に僕^{しもべ}の姿であり、パウロもピリピ書で言っています。だから、足を洗われたという姿もそうでしたし、キリストのお姿というのは本当に低く低く、これ以上は低くは行けないところまで、自分が一番どん底へ降りて行かれて、そこで担^{にな}いあげています。十字架はみんなを担っている。十字架で担われないものは何もない。キリストがもう、本当にどん底からぐつと担っておられるのです。

その担いの力、贖いの愛の底力、これに打たれて、

「主さま参りました。本当にあなたの愛の深さ、すごさ、これにはかないません」



という、本当にそれを受けとらないとね。自分に力みがあればまだまだです。ですから、本当にキリストに委ねて下さい。私はそのことを味わいましたから、人様にも自信をもつて言えるのです。委ねて下さい、大丈夫ですよ。

●目標に対する姿勢

最近とても感動したのは貴花田たかはなだ関ですよ、今場所優勝したから誉めているのではない。あの人の相撲に対する姿勢です。あの人は本当に数場所前はぱつとしないこともありました。5勝10敗ということもありました。記者から「調子が悪いのですか」と聞かれ、

「弱いから負けるのです」

と。それしか言わなかった。たとえ、調子が良いときでも、数場所前、絶対に大きい力士に対しても逃げなかった。正面からぶつかって行きます。そして跳ね飛ばされて負ける。ひらりと体をかわせば、そういうことをやれば、向こうも警戒してあまり突っ込んで来ない。そうしたらもつと楽に勝てるのにと思いますが、絶対にやらない。

その謎が解けました。今場所の10日頃だったか、朝日新聞だったか、相撲の欄に書いてあった。今場所、急に貴花田関が強くなって、理事長から他の親方も、みんな驚いているところだが、お師匠さんに言わせたら、急に強くなったのではなく、3年前のけいこが今実を結んだと、貴花田はいつも3年先の自分の姿を目標にして稽古をやってきた。だから目の前の一勝だとか一敗だとか、連敗だとかそんなものは問題でない。

とにかく3年先の自分の姿のビジョンを描いて、かくありたいという姿を描いてそれに向かって毎日毎日やっているのです。それで今日一番、この日の一番に全部集中する。勝つても負けても関係ありません。だから、彼はじつと目をつむっていますね。それで、目の前で誰が勝とうが誰が負けようが関係ありません。「私は私の相撲を取る、一日一生、今日一番に」と。

そして、今場所に備えて巡業中の稽古を取材した人がいる。「貴花田が一番早く起き、一番よくやった、あの稽古量に勝る者はいなかった」という。そういう話を聞きますとね、20歳ですよ、あれだけ人気があつていろいろな誘惑があると思うんです。それをねのけて自分の相撲に徹するという相撲道ですね。私は相撲を見ても勝った負けたで喜んで見ているということではなくて、姿勢を見ている。

そういう姿勢はやはりオリンピックピックだったら、谷口選手あの姿勢、「踏まれちゃいました、靴が脱げて引つ繰り返りました、はっはっは」と、ひよこひよこ首を振りながら、追いかけて、最後まで頑張った、ああいう姿は本当に感動しますね。

要するに自分を完全燃焼させている姿だと思います。目先のことにこだわらない。正にこれはキリストにある者の生き様なのです。



●勝利の十字架

我々の国籍は天にある。そしてこの旅路をひたむきに、後ろのものを忘れ、前に向かって進んでゆく。そのお手本がパウロさんです。

パウロさんは確か62歳ぐらいで、殉教されたのではないかと思います、あの盛んなしとも本当に筆舌につくしがたいような試練に見舞われて、それを乗り越えて行っています。そういう意気盛んなところに感動して、皆さんも上から来る力に、主さまから無条件に来る力に委ねて下さい。我々はあるがままでいい。悩んでいたら悩んでいるまま、重荷を負っていたら重荷を負っているまま、そのままの自分をキリストに、キリストの十字架に委ねて下さい。

「凡て勞する者、重荷を負う者、我に來れ、われ汝らを休ません。我は柔和にして心卑ければ、我が軛を負いて我に學べ、さらば靈魂に休息を得ん。わが軛は易く、わが荷は輕ければなり」（マタイ11・28～30）

これはなんともいえない慰めに満ちた言葉ですね。

「私と一緒に軛を負え。私は柔和にして心卑ければ、私が一緒に軛を負おうじゃないか」

と。キリストは私のところに降りて来て、あなたのところに降りて来て、

「一緒に歩こうよ、一緒に二人三脚で行こうよ」

と、それがキリストですね。

それで、こういうところは何度も熟読するのです。

「キリストが私に、あなたに、じかじかに今この言葉を語りかけて下さっている」

と、そう思いながら読む。そして、十字架を瞑想するんです。十字架を瞑想するときはいつも、主さまの姿を瞑想する。その主さまは、十字架され給うた主さまの姿なのです。時にはその十字架は血が滴り落ちていた十字架。時には黄金色に光輝いている十字架。私の場合は、光輝いている十字架をどうしても瞑想してしまう。

「もう、お前のマイナスは全部引き受けたよ。心配するな、大丈夫だよ」

と、そのように私には迫って来るのです。

そこが解決の場所ですよ。十字架、かつては血潮滴る十字架だった。本当にキリストの苦悩の十字架でしたが、いまや光り輝いて勝利の十字架として、そこから生命が流れて来る。そういう十字架の前では自分なんて問題ではない。「自分が何をした、これから何をする」、そんなことは問題ではない。このキリストのすごい生命の、この世界に優るものがあるのか。宇宙を抱いておられるのですから。

●キリストによる変貌

この間、毛利さんが行って来たあの宇宙も全部キリストに抱かれているんですから。向



こうは無重力という。こっちは引っぱりつこをやつて、誰が重い、誰が軽いのとやっています、向こうに行ったらみんな軽い無重力、みんな平等で指で突いたら飛んで行くような世界。反動でこっちも飛んで行くと言っていましたよ。何か作業をする時は、足を固定して作業をしていました。全く別次元の世界、それを同じ人間が味わってきた。

これは何も300キロも地球から離れて飛んで行かなくても味わえる。これが十字架の御霊の世界のすごさです。初めて聞く人だったら、それはまあ作り話と言われるかも知れませんが、皆さんだったら、分かって下さると思います。我々は今地上にありながら、聖霊の世界、キリストの生命の御霊の世界を同時に同じ場所で味わわせていただくのです。かすかにでも味わっておられると、そのかすかが次第にはつきりとしたものになってくる。

だから、齢を重ねることは嬉しいことなのです。気持ちの上ではますます意気盛んという気持ちで、生涯現役と思っています。こういう意気盛んな姿は、20年前、30年前の私からは想像もできなかった。昔は神経質で弱々しかつた。ところが段々年を取るごとに不思議なことに、体まで健やかに逞しくなってきました。心も霊も体も渾然一体に総てが展開していく。主さまが下さるのはそういうものではないでしょうか。

だから、「過去が悪かった、こういう病歴をもっていた」と、そのようなものに決して囚われないで、

「私はキリストの生命によって変貌していくのだ」

と、そういうふう大胆に祈って、前に向かって、上に向かって進んで欲しいのです。自然にそうされていく。この路傍の石が、名もなき野の花がこんなふうに輝いているということが、私は福音の勝利だと思います。初めから素晴らしい人が輝くのは何も勝利ではありません。初めから立派な人が立派になったって、「あの人は元々立派だったじゃないか」と、それで仕舞なのです。神様の栄光は現れない。変貌してこそ

「やっぱりキリストはすごい」
ということですよ。

●キリストとの出会い

私は、『聖書に初めて接する人のために』（1991年12月22日発行）の中に書きましたね。あの通りなのです。私には私なりにいろいろな悩みがあつて、大学を卒業して2年目位の時に本当に行き詰まつて、もうこれで総て手放そうというか、

「何もいらない。ただ、私に従つて来なさい、私に従つて来ればいいんだよ」という、声をかけてくれる人だけを求めていたのです。それはキリストでした。

そのキリストに導いて下さったのが、市川喜一兄だった。幸せなことに同じ大学にいました。専門は、私は民法であの方は法哲学でしたけれど、その市川喜一君がいてくれた。1956年の7月7日の七夕の夜、彼との出会いがありました。



ちやうど、市川君が今回手紙を下さいましたので、ちよつと読ませていただきたいと思います。

「栄光在王。日頃の主にある御友情と祈りを心より感謝します。小生の記憶に間違いがなければ、大兄には9月28日に還暦をお迎えになると存じます。若い日に主に出会い、主から賜った恵みと使命に忠実に歩まれました大兄の40年に近い歩みに心よりの敬意を表し、この人生の一区切りの時を跳躍点としてさらに大きく御前進下さるよう祈つて止みません。若い日に共に主にある歩みを始め、共に還暦を迎えるようになりましたことに、感慨を覚えています。主にある歩みの中で得られました練達の士、大兄でなければ果たせない使命が、これから大兄の生涯にはあると存じます。主の恵みの力が大兄と共にありますように祈りあげます。良き共働者、御奥様にくれぐれもよろしくお伝え下さい。」

他の方々のお手紙は明日午後にも御紹介したいと思いますが、今日はこの方のお手紙だけを御紹介させていただきました。

●一筋の道

それから後、曲折がありました。けれどもあの時に与えられた光、一筋の道をずっと変わりなく今日まで参りました。それで私は本当に良かったと思っています。だからいつも、「あの時に古き自分は死んだ」

と思っている。その気持ちは今もずっと変わらないのです。皆さん、「あれをやろう、これをやろう」と野心を持ったら、野心に縛られてしんどいですよ。でも

「もう、古き我は一旦死んだ。新しい私を生み出していただいた」ということ。

「我キリストと偕ともに十字架につけられたり。最早もはやわれ生くるにあらず、キリスト我が内に在りて生くるなり。今、われ肉体に在りて生くるは、我を愛して我がために己おのが身を捨て給いし神の子を信ずるに由りて生くるなり。我は神の恩恵めぐみを空しくせず、もし義とせらるること律法おきてに由らば、キリストの死に給えるは徒然いたすらなり」（ガラテヤ2・20～21）

この心です。口先だけではだめです。本当に自分の人生をそのままの姿で、お釣りの人生（余生）と思つて生きる、それが勝利の秘訣ですね。

●キリストの復活は必然

「この故にもしキリストによる勸すすめ、愛による慰安なぐさめ、御霊の交際まじわり、また憐憫あわれみと慈悲とあらば、なんじら念おもひを同じうし、愛を同じうし、心を合わせ、思うことを一つにして、我が喜よろこ悦びを充たしめよ」（ピリピ2・1～2）



誰のところで実現するのか、一番近いのは家庭ですよ。家庭が一番このパウロさんの勧めを実現する場所です。そして集会、職場、どこでも良い。

「何事にまれ、徒党また虚栄のためにすな、おのおの謙遜をもて互に人を己に勝れりとせよ。おのおの己が事のみを顧みず、人の事をも顧みよ。汝らキリスト・イエスの心を心とせよ。即ち彼は神の貌にて居給いしが、神と等しくある事を固く保たんとは思わず、かえって己を空しうし僕の貌をとりて人の如くなれり」（ピリピ2・3～7）

年齢の上下を問わず、人が自分のためにいろいろなことをして下されば、本当にそれを喜び尊び、感謝するという気持ち。自分のことは放っておいても顧みますからね。だから、「人のことを顧みなさい。神と等しくあるキリストでさえ、栄光の座を捨てて、みすばらしい姿で、己を空しくし、僕の貌をとって現れて下さった」

と。この時代の僕というのは、主人の言い付けにはハイハイと己が意志を全部預けてしまいうぐらいの姿ですから。キリストはそういう神の僕になって下さいました。

「すでに人の状にて現れ、己を卑うして死に至るまで、十字架の死に至るまで順い給えり」（ピリピ2・8）

だから神様は放っておかれなかった。これを放っておかれたら、神様の義は立たない。キリストが捨てられて、十字架で死につばなしで、地獄に閉じ込められたままであつたならば、これはもう神様の義が立ちません。だから、地獄を蹴破つて、墓を蹴破つてあの栄光のお姿に、未だかつて誰もとつたことのない霊体に、本当の輝く霊体となつてキリストは現れて下さった。そして天に昇り給うた。これはもう必然であります。

●イエス・キリストは主なり

「これ天に在るもの、地に在るもの、地の下にあるもの、悉くイエスの名によりて膝を屈め、且もろもろの舌の『イエス・キリストは主なり』と言いあらわして、栄光を父なる神に帰せん為なり」（ピリピ2・10～11）

私は決して仏教やイスラム教の人とか、その他の人に対して自分の宗教を押し付けませんし、その方々の宗教をけなしはしません。それぞれ尊びます。しかし、

「このキリストの姿をとつてくれた人があるのですか」

ということを知りたいですね、このような姿をとつた方が他にあるのかと。お釈迦さんだつてどなただつて立派でしょう。けれどもこのキリストの姿をとつた方がいるのか。この姿で徹した方を神様は放っておかない。最高のところに引き上げて、すべての者が膝を屈めて「イエス・キリストは主なり」と告白する。これを私は信じて疑わない。向こうの世界に行くと、はつきりすると思う。だから、決して宗教で争わないで欲しい。我々は我々の達しえたところに従つて進んだらいいので、他の人にうちの方が立派だとか言つて喧嘩



をすることはないので。

●全きキリストの生命

「されば我が愛する者よ、汝ら常に服^{したが}いしごとく、我が居^おる時のみならず、我が居^おらぬ今もますます服^{おそ}い、畏^{おの}れ戦^{おの}きて己^{おの}が救^{きう}を全^{みこころ}うせよ。神は御意^{みこころ}を成^なさんために、汝^{うち}らの衷^{うち}にはたらき、汝等^{うち}をして志望^{こころざし}をたて、業^{わざ}を行^なわしめ給^{たま}え

ばなり」（ピリピ2・12～13）

「己^{おの}が救^{きう}いを全^{みこころ}うせよ」とちゃんと書いてあるでしょ。各人本当に全き救^{きう}い、全きキリストの生命^{いのち}に吞^{のみ}み込まれて下さい。そしてちゃんとこの世でしっかり自分の仕事^{しごと}があると。

「なんじら咄^{つづ}かず、疑^うわずして凡^{みな}ての事^{こと}をおこなえ。是^{これ}なんじら責^せむべき所^{ところ}なく素直^{すなへもの}にして此^{この}の曲^{まが}れる邪惡^{よこしま}なる時代^{よこしま}に在^ありて神^{かみ}の暇^{ひま}なき子^ことならん為^{ため}なり。汝^{うち}らは生命^{いのち}の言^{ことば}を保^{たも}ちて、世^よの光^ひのごとく此^{この}の時代^よに輝^{かが}く。斯^{かく}て我が走^{はし}りしところ、勞^{あは}せしところ、空^{むな}しからず、キリストの日^ひに、われ誇^{かこ}ることを得^えん。さらば汝^{うち}らの信仰^{しんぎょう}の供物^{くぶつ}と祭^{まつり}とに加^{くわ}えて、我が血^ちを濯^{そそ}ぐ「殉教^{しゆんぎょう}のこと」
とも我^{われ}は喜^{よろこ}ばん、なんじら衆^{すべて}と共に喜^{よろこ}ばん。かく汝等^{うち}もよろこべ、我^{われ}とともに喜^{よろこ}べ」（ピリピ2・14～18）

●主^{きりすと}に在^ある一事^{こと}に向^{むか}って

「われはすでに捉^{とら}えたりと思^{おも}わず、唯^{ただ}この一事^{こと}を務^むむ、即^{すなは}ち後^{あと}のもの^{もの}を忘^{わす}れ、前^{まえ}のものに向^{むか}いて励^むみ、標^{めあて}準^{じゆん}を指^さして進^{すす}み、神^{かみ}のキリスト・イエスに由^よりて上^{うへ}に召^よしたもう召^よにかかわる褒^ほ美^びを得^えんとて之^{これ}を追^おい求^{もと}む」（ピリピ3・13～14）

皆さん、「この一事^{こと}を」というのはいろいろなものがあると思う。「一つのことをしたい」という一事^{こと}もあるでしょう。

「私はもう、キリストに捕^{とら}まえられてしまう。キリストと一如^{いちに}になる。これが私の一事^{こと}だ」

とそれでも良いです。そのときそのとき、その人その人にとって、「我が一事^{こと}はこれだ」というものをしっかり持って、それに自分を捧^{たも}げて、後ろ^{うしろ}のものを忘れて前^{まえ}に向^{むか}ってひたむきに進^{すす}むと、それでこそキリストは

「我が友^{とも}よ、我が子^こよ」

と、呼^よんで下さるのです。

「臆^{おそ}病^{びよう}な者^{もの}、信^{しん}じない者はだめだ」

と、黙^{もく}示^し録^{ろく}に書いてあります。

「愛^{あい}には恐^{おそ}れなし、全^{かん}き愛^{あい}は恐^{おそ}れを除^{のぞ}く」（ヨハネ第一の手紙4・18）



ということなのです。ですから、愛なる主さまの前では本当に恐れとか、不信だとか、疑いとか、そんなものはかなぐり捨てて、大胆にキリストの愛のみ懷に飛び込んでいつて、「主さま、参りました」と言う。

「本当にやって来ましたよ」

という「参りました」と、

「あなたに降参しました」

という「参りました」と両方です。

「参りました、よろしく頼みます」

と、生きのよい魚になって、江戸っ子のような、ピチピチした魚になって——「魚」というのは昔キリスト者の暗号だったのですね。昔、迫害の中、カタコンベに逃れたりしている時に魚の絵がキリスト者の徴^{しるし}だったそうですから——そういうふう生き生きと活かしていただきたいと思います。

（1993年12月19日 京都キリスト召団発行「還暦記念講筵（1）『唯この一事を』から転載）

